

「能動的な学習環境整備のための学生の学習環境現状把握に係るインタビュー調査業務報告書」



目次

1) 背景・目的

2) 先行研究

3) 調査設計・デザイン

4) 調査結果

1) 背景・目的：調査内容

調査内容：観察把握法（オブザーベーションスタディ）と同行把握法（アロングスタディ）、エスノグラフィ法の手法を応用、学生の学習環境や学習設備・学習支援に関する意識や心理の状態・現状の精緻な把握を実現

調査目的：

- 学習支援施策、アクティブ・ラーニング推進の具体的な施策・機器等の活用に関する学生の活用意図・心理的状态・障壁を把握する
- （設備）図書館を始めとする設備の利活用促進・阻害要因を把握する
- （機器）単焦点プロジェクタ等グループ学習等を支援する機器の利活用に関する促進・阻害要因を把握する
- （支援）ラーニング・アドバイザー等のアカデミック・スキルズや学習支援に関する（ライティングや文献収集のガイド、LA・LeCIS・ALA、空きスペースの利用など）の利活用に関する促進・阻害要因を把握する
- 教室内外学習のパターンの把握
- 非テスト期における教室内外における学習のパターンを把握する
- ゾーニングのための学習行動と学習目的のイメージの差異の理解を行う
- 提供者側意図と学習者側の利用実態の差異の理解を行う（サイレントゾーン、ディスカッションゾーン等）



実施日程	実施内容	対象	目的
2018年10月24日（水）	オブザーベーション調査	キャンパス内の施設利用状況を把握。	現在形成されている各学習場所に対する印象・特性把握
2018年10月25日（木）～11月5日（月）	仮説の協議	建築士の視点を踏まえてマッピングに基づき調査仮説を協議	アロング・エスノグラフィにおけるインサイト発掘
2018年11月13日（火）～11月14日（水）	アロング・エスノグラフィ調査	リクルーティング学生（大学生1-2名ペア）（学年）1-4年次（属性）人社・理工、各6名程度を予定	環境を起点とした学習行動と学習環境選定に関するインサイト（洞察）の把握
2018年11月15日（木）～11月30日（金）	調査結果のとりまとめ	調査結果を資料としてまとめ上げる	ステイクホルダー向けの共有資料とする
2018年12月3日（月）～12月21日（金）	改善提案・提言のための協議、調査業務報告書作成	調査結果に基づき改善内容に関する協議を実施・合意	学内での生きた提言とすることを目的とし実地での提案に関する協議・合意を行う

1) 背景・目的：調査の背景

なぜ量的調査ではなく質的調査なのか？

- ・学生の、環境の中での見えざる合理的な判断を理解する必要があるから。アンケートでは見えない。

今回の調査の視点は学生である

- ・利用者視点で考えると課題がよく見えてくる（おもねるのではないです）。それが今まちづくりやものづくりの考え方にも適用されて成果をあげている。

そもそも学習環境って何？

- ・環境とは人（学生・教員・職員）とは不可分のものであり、教室や図書館といった断続的なだけで考慮すべきではない。大学を一つの街を捉えると分かりやすい。

学生の現状の学習に対する動機とは？

- ・理想とする自律的・内発的学習者（好きだからやる、やりたいからやる）を目指す上での現状の姿は、かなり外発的で、社会規範を含めて外発性が確立されてしまっている部分がある。また提供側である教員の提供教育コンテンツや手法も、まだまだ内発性を引き出すような仕組みになっていない。

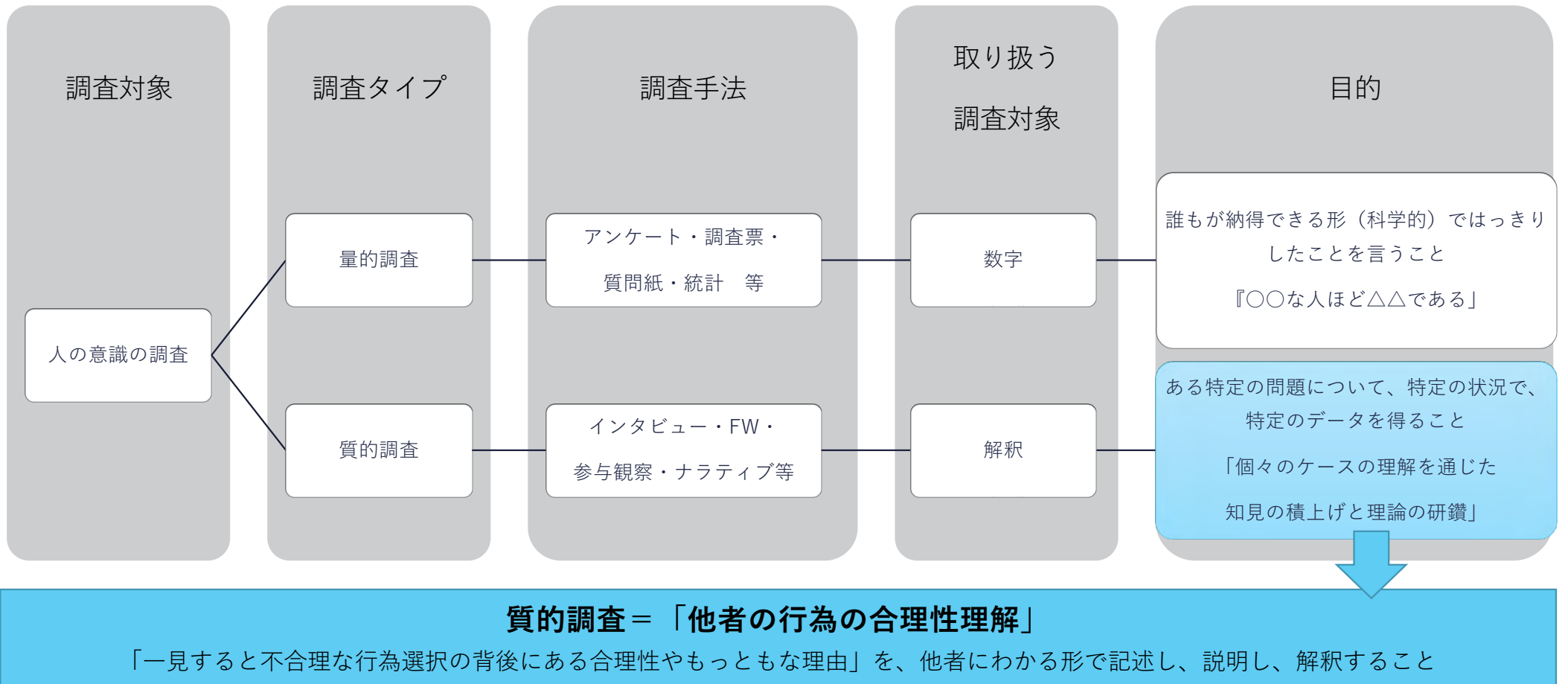
どうすれば自律的になれるか？

- ・本人の意識変容を促すには、きっかけを与える居心地の良い自由な環境と周囲との良い関係性が必要

既存の環境はどうなのか？

- ・良い部分もあるが、改善点も多い。特に滞在や交流をしやすい環境とは言い難い。占有的なスペース（意図した・意図しない両面で）が有する課題が特に大きい。いかに公共的価値のあるオープンな場と雰囲気を作れるか、学生がいたいと思える大学環境にできるか、コミュニティデザインの手法の応用などクリエイティブな解決策が求められる。

1) 背景・目的：質的調査とは 「他者の行為の合理性理解」



「人間の（「外的」または「内的」）行動は、あらゆる出来事がそうであるように、その成り行きの中に、いろいろな関係やいろいろな規則性を持っている。しかし、少なくとも完全な意味で人間の行動にのみ固有なことは、そうした諸関係や諸規則の経過を、理解可能な形で解明しようということである。（理解社会学のカテゴリー マックス・ウェーバー著）

2) 先行研究：タフツ大学 学習空間アセスメントプロジェクト

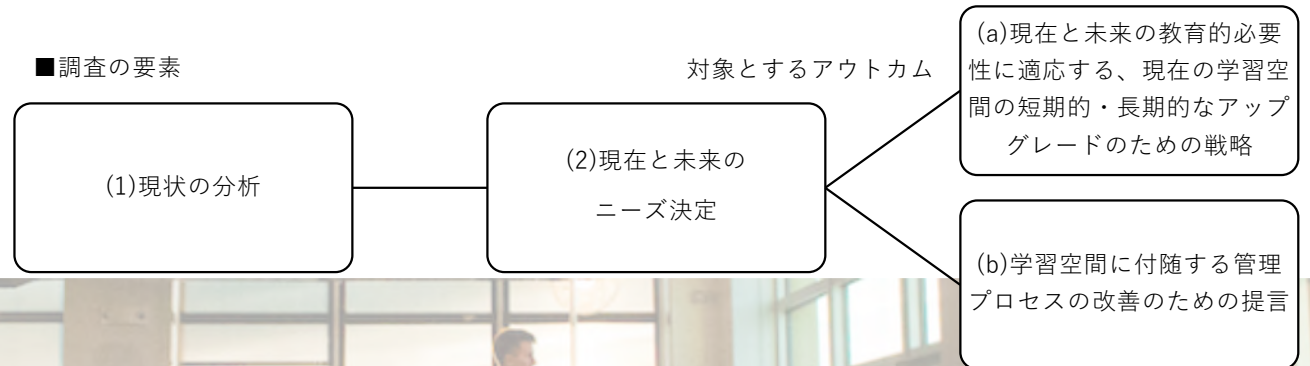
学習空間アセスメントプロジェクト：

教育的ミッションに対する教育学習空間の重要性の認識のため、Tufts大学は2014年夏に、キャンパス内の多様な学習環境の質・持続可能性・マネジメントの改善のために短期および長期計画をもつゴールを持って、学習空間のニーズと状況の研究に着手することを決めた。タフツ大学の「キャンパスプランニング部門」が企業経営コンサルティングのBiddison Hierと建築企業のSasaki Associatesとともに、教育に関する研究および教育工学に基づく近代的な手法を用いてタフツ大学のMedfordとSomervilleキャンパスにおける学習環境調査を実施。

調査目的：近代的な教育学の手法に基づいて学内の学習スペースを整備することを目的とする

調査対象：主な施設の教室、講堂、研究室およびコンピューター室など、キャンパス内総面積250,000平方フィートにわたって存在する260箇所の学習スペース（195箇所の公式学習スペースおよび65箇所の非公式学習スペース）。

■ 調査の要素



2) 先行研究：タフツ大学 学習空間アセスメントプロジェクト 調査内容

インタビューやFGIを通じて、スケジューリングや学習スペース管理に関するプロセスとポリシーが有する課題と改善機会の発掘調査を実施。具体的には、スペースの有効活用を阻害しているプロセスやポリシーの同定、また学習環境の改善を促進することが可能なプロセス、ポリシーや組織構造などを含む。



Tasks 5 and 6: Assess learning spaces scheduling processes and administrative processes for upgrading learning spaces

学習スペースにおけるスケジューリングおよび管理プロセスの評価

Task1からTask3の情報・分析をもとに、短期的・長期的な学習スペースの改善に関する対策を提案。近代的な教育アプローチを支援し、促進することが可能な学習スペースを創出するために必要な改修に注力。改修を通じて、全ての学習スペースにおける教育・学習の質の底上げをはかる。



Task 4: Evaluate and identify improvements to learning spaces and provide cost estimates

学習スペース改善点の同定ならびにコストの算出



Task 1: Evaluate existing conditions of Tufts' learning spaces

タフツ大学の学習スペースの現状分析

タフツ大学キャンパス内の学習スペースをルームタイプ、ロケーション、サイズ、収容人数、配置、学習家具およびそのレイアウト、テクノロジーや学習スペースへのアクセスなどの要素に基づき分析する手法を確立。分析チームは1週間以上の期間をかけて、260箇所の学習スペースを調査し、基盤となる情報としてデータベース化し、記録。



Task 2: Survey stakeholders' learning space needs and preferences

主な利害関係者（教員・職員・学生）のニーズと好みの調査

学生の関与を義務付ける

- 学生は、教育改善が機能しているか機能していないかについての「現場の」フィードバックの重要な情報源である。
- 学生は計画の適合性（リアリティチェック）を評価する

※タフツ大学では、本調査を受けて、現在は学生の関与しないプログラムについては実施を差し替え、学生の見解が含まれるプログラムであることが保証されているプログラムとすることが義務付けられている。



主な利害関係者の学習スペースに関する捉え方や考え方をFGI、インタビュー、オンラインサーベイを通じて収集。調査内容は公式な学習スペースの利用に加えて非公式な学習スペースの利用、また教育環境に望ましい形式、テクノロジーの活用などを含む。サーベイは位置的な要素（キャンパス内のロケーションごとに、回答者が教育、学習スペースについてどのような捉え方や考え方を有しているか）も加味し、ニーズや嗜好に関する詳細を引き出す質問項目を作成。139名の教員、107名の職員、574名の学生の計820名の回答を収集。

Task 3: Conduct a learning spaces utilization assessment

学習スペースの活用度調査

各タイプ別に公式学習スペース（260箇所のうち、195箇所）における部屋や座席の需要と供給に関する量的調査を実施。調査対象のスペースには登録制教室と非登録制教室の両方を含む。また、両教室をセグメント分けし、情報収集を実施。

2) 先行研究：タフツ大学 学習空間アセスメントプロジェクト 調査結果

1. Misalignment of Inventory with Modern Pedagogical Approaches / 近代的な教育アプローチと学習設備の不一致

- 80%の教員が自らの教育手法を教室のデザインに合わさなければならないと回答
- 55%の教員が学習に適した教室が不十分であることが、新たな教育手法の探索・追及を阻害していると回答

2. Upgrades to Physical Conditions / 物理的な学習環境の改修

- 基礎的な改修（塗装、カーペット、照明など）から機能面の改善（スクリーンやコンセントなどの配置など）までが必要

3. Enrollments and Supply versus Demand / 登録および需要と供給のバランス

- クラスサイズ（受講者人数）は小規模なものが多く（77%の授業が25人以下）、教室のサイズとクラスサイズが不一致

4. Scheduling, Utilization and Scheduling Policies / スケジュール、活用度およびスケジュールポリシー

- 金曜日、また週を通して午前中の活用度が低い
- スケジュールポリシーに準じていない学部が45%
- 事前登録は要らない教室の活用度が低い

5. Process and Management Issues around Learning Spaces / 学習環境に関するプロセス・管理課題

- 学習環境整備の予算は各法人に割り当てられており、法人全体で戦略的かつ長期的な学習環境の管理と改善が困難
- 様々な改修がなされているが、教育・学習に関する研究開発が学習環境の改善に生かされていない
- 学習環境に関する大局・全体像が描けていないため、学習環境整備に関する重要なニーズが長年取り上げられていない
- 学習環境に関する情報が集約されておらず、信頼できるデータベースが存在しない

3) 調査設計・デザイン：調査テーマ 学習空間の利活用用途・利用イメージをマッピング把握

テーマ1：授業外学習時間が増えるような学習環境をつくること、様々な学習ニーズを満たす選択肢の提供

場所：正課外学習スペース

1. 各スペースを使用実態に応じて分類：アロング・オブザベーションスタディを通じて学習空間の利活用用途・利用者イメージをマッピング把握
 - 空間スペースの最適配分がなされているか？
2. 特定ラーニングスペースの独自学習環境アセスメント
 - 図書館内アクティブラーニングルーム
 - 人文社会科学棟エントランス
 - 総合教育棟エントランス
 - 自然研究棟プロムナード・ほんわかフェ

テーマ2：アクティブラーニンググループの導入の効果

場所：正課内学習スペース

1. LSRSを活用したアクティブラーニンググループのアセスメント

「Learning Space Rating System (LSRS) は、学習スペースの潜在的なパフォーマンスを測定する枠組みを提供するものです。つまり、学習者とインストラクターが空間をどのように活用できるかを評価する枠組みです。」

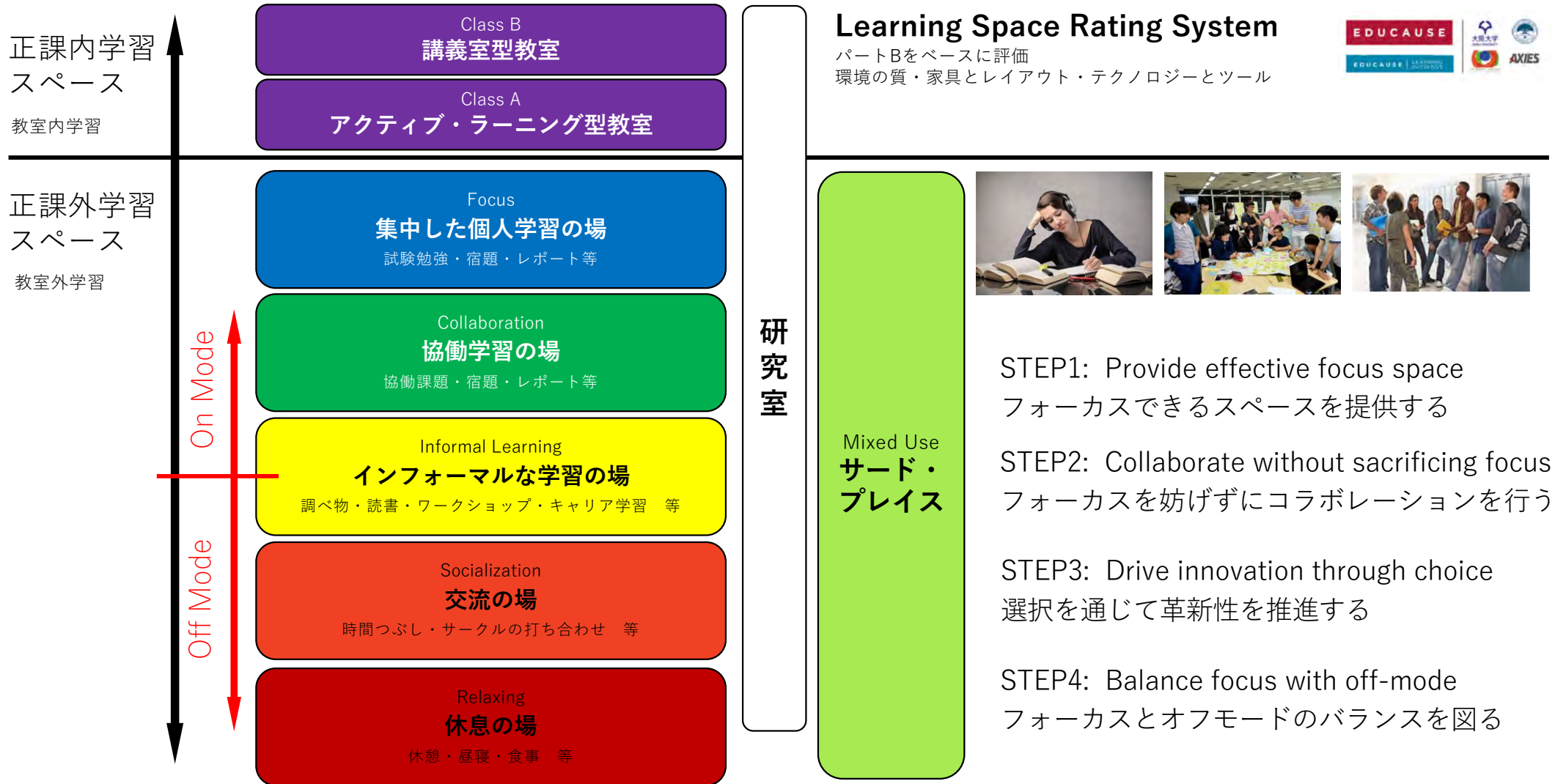
LSRS
Learning Space Rating System
学習スペースの評価システム
日本語版



セクション4 | EQ | 環境の質32ページ

1. 日光 学習スペースに日光を取り入れることにより、学習をサポートし、学業への集中やエンゲージメントを向上させる。
2. 外が見えること 外が見える意を作ることによって、学習とエンゲージメントをサポートする。
3. 視認性 各参加者から、プレゼンター、コースの内容、デモンストレーション、他の参加者が十分に見えるようにする。
4. 照明のコントロール 異なる学習活動に合わせて照明をコントロールすることができる高い柔軟性を確保する。
5. 温度のコントロール スペース内の温度のコンディションが学習を効果的にしている。
6. 音響の質 効果的な部屋の音響設計によって、発表者、オーディオコンテンツ、および相互の声を聞き取り易くする。
7. 環境・文化的包括性 審美的・刺激的で、文化的包括性を持った雰囲気を作成し、学習活動へのエンゲージメントを促進させる。
8. アクセシビリティとユニバーサルデザイン 多様で異なる能力を持つ参加者のために、包括的で安全なアクセシビリティの高い環境を創造する。

3) 調査設計・デザイン：各スペースを使用実態に応じて分類



Learning Space Rating System

パートBをベースに評価
環境の質・家具とレイアウト・テクノロジーとツール



STEP1: Provide effective focus space
フォーカスできるスペースを提供する

STEP2: Collaborate without sacrificing focus
フォーカスを妨げずにコラボレーションを行う

STEP3: Drive innovation through choice
選択を通じて革新性を推進する

STEP4: Balance focus with off-mode
フォーカスとオフモードのバランスを図る

Gensler Inc.の定義するクリエイティブプレイスを参考に (株) ラーニング・イニシアティブが作成

3) 調査設計・デザイン：調査の進め方 ①各スペースを使用実態に応じて分類

<使用実態の分類におけるマッピング調査>

●各スペースを使用実態に応じて分類

●分類した性質に合わせ、地図にマッピング

On Mode

Class
教室
授業

Focus
集中した個人学習の場
試験勉強・宿題・レポート等

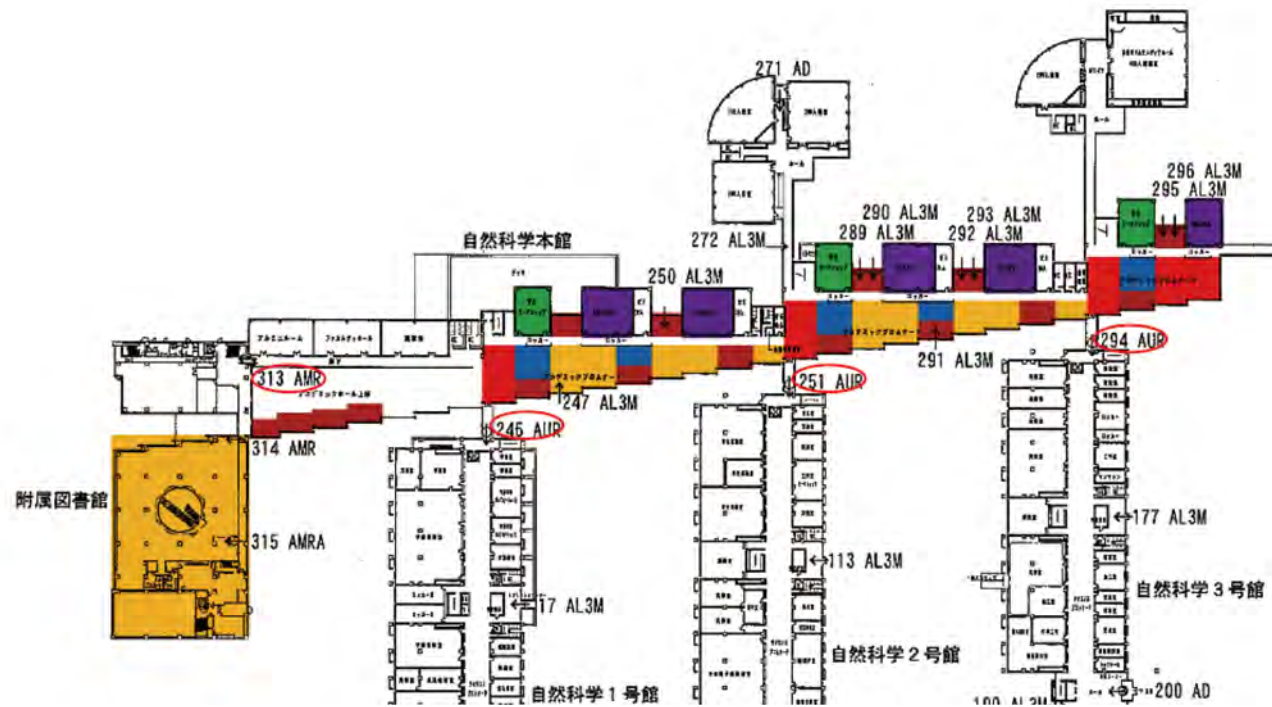
Collaboration
協働学習の場
協働課題・宿題・レポート等

Informal Learning
インフォーマルな学習の場
調べ物・読書・ワークショップ・キャリア学習 等

Socialization
交流の場
時間つぶし・サークルの打ち合わせ 等

Relaxing
休息の場
休憩・昼寝・食事 等

Off Mode



マッピング調査イメージ

※分析対象範囲は要検討（地盤レベルに絞る等の検討が必要）

3) 調査設計・デザイン： ②特定ラーニングスペースの独自学習環境アセスメント

- 図書館内アクティブラーニングルーム
- 総合教育棟エントランス
- 人文社会科学棟エントランス
- 自然研究棟プロムナード・ほんわかフェ

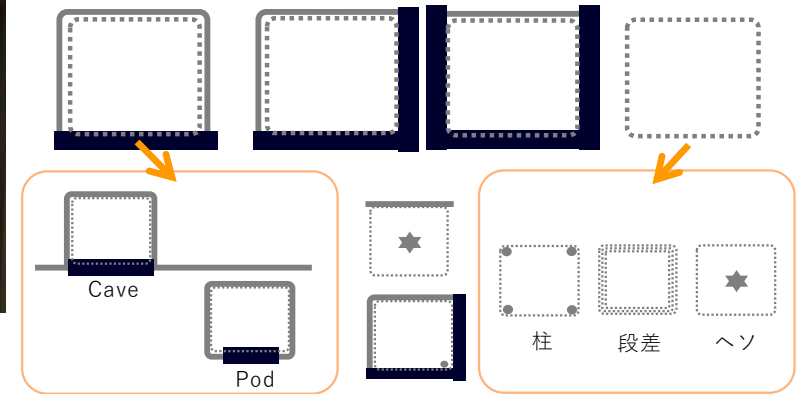
構成と利用実態の関連性を探ります。

●平面分析

壁やパーティションの形状の分析を行う。

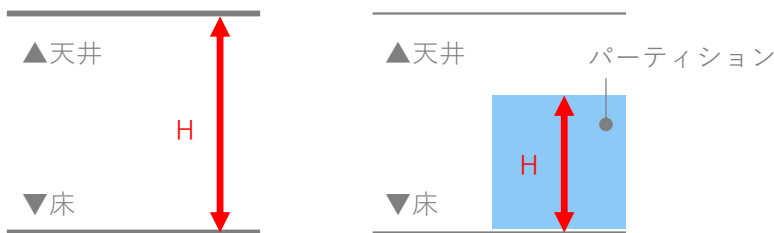


1辺開放 2辺開放(corner) 3辺開放 4辺開放



●断面分析

天井高、パーティションの高さの分析を行う。



●家具方向性分析

家具の形状や配置がどうなっているかを、主に視線の方向に着目し分析する。

